

志 雲 会

「心の故郷 唱歌・童謡について」

令和 三年 十月 十七日 (日)

今村忠男

はじめに】

技術が進歩し、社会が高度化・複雑化する程に人間同士の触れ合いが重要となってきます。今回のコロナ禍で、リモートやオンラインで仕事などが成り立つことがわかってきましたが、その反面、人と人が顔を合わせて暮らすことの重要性が再確認されたと思います。

顔を合わせ、意思疎通を図ることで、同じ思いや互いの違いを知り、人となりがわかり、心を通わせることができます。これだけ世界の流れが早く、ひとつでつながっている時代ですから、世界的視点で俯瞰していく必要があるのはいうまでもありません。

現実に関心を落としますと、アジアの緊張は高まっており、我が国は埋没することなく発展していかなければなりません。民族や国家が発展するかどうかは、その國の文化や価値体系によるところが大きく、歴史や言葉を忘れた民族は滅びるといわれています。

言葉や心に注目しますと、我が國は、古くは万葉集など和歌や雅楽・吟詠（ぎんえい）・長唄などがあり、近代化を図った明治維新後には、唱歌や童謡といったものが認められます。昨今は、アニメソングが世界に認められていますが、同じ歌でも人格形成の一助、また言葉の美しさや心の豊かさを表したものが、唱歌や童謡といえるのではないのでしょうか。

故郷（唱歌）】

兎 追いし かの山※1 小鮒 釣りし かの川
夢は今も めぐりて 忘れがたき※2 故郷
如何に※3 います 父母 恙なしや※4 友がき※5
雨に 風につけても 思い出ずる 故郷
志を はたして いつの日にか 帰らん※6
山は青き 故郷 水は清き 故郷

※1：あの。 ※2：忘れられない。忘れることができない ※3：どのように。どうして。

※4：病がなく息災な様子。恙は病などの災難の意味。

※5：特に親しい友達。垣根のように友情を結んだ仲間の意味。

※6：帰るであろうの意味。「らむ」は推量を表す。

「兎追いし」は「兎を追いかけた」、「かの山」は「あの山」という意味です。同じように「小鮒釣りしかの川」も「小鮒を釣って遊んだ、あの川」となります。楽しかった子供時代の思い出が、今も頭の中を巡って忘れられないというわけです。

第二節の冒頭は、「どのように過ごしていますか、お父さん、お母さん。相変わらず元気

でやっていますか友達」となります。雨が降ったり、風が吹いたりするたびに、懐かしい故郷での出来事が思い出されるという内容から、主人公が故郷を遠く離れた土地で生活しているということも伝わってきます。

第三節では、「自分の目標（志）を達成して、いつの日か故郷に帰るだろう」という決意を新たにします。「故郷に錦を飾る」という言葉の通り、目標を成し遂げて故郷の親元に帰ることは何よりの親孝行であったわけです。末尾の「山はあおき故郷、水は清き故郷」という部分には、自分の故郷に対する誇りや愛情が描かれています。自分の生まれ育った土地を大切に思う気持ちは忘れたくないものですね。

このように故郷に描かれている世界は、現代社会から見れば確かに遠い昔の話かもしれませんが、しかし、その中に出てくる情景や状況は、すべてその当時の様子をそのままに描き上げたものでもあります。実は、こうした作品の意味もしっかりと感じ取りながら感情移入して歌う作業は、人間にとって最も大切な「思いやりの心」にも結ぶつくものなのです。

歌の中に出てくる主人公の気持ちを受け止めて、自分自身の出来事のように歌うことができる作品は、現代にもたくさんあります。しかし、その内容が純粹でシンプルなことが唱歌や童謡の最大の特徴なのです。唱歌や童謡を唄っているだけで心が洗われるような気になるのも、こうした心の動きがあってこそなのです。

【作者の故郷】

作詞した高野辰之は長野県永江村出身です。その村の川を見下ろす橋から北を見ると、緑が濃い二つの山がそびえ、その間に黄色の棚田が層をなしています。この山が「かの山」です。この一帯では大正時代まで二月下旬に「兎追い」をし、山の麓に子供たちが一列に並び、大声を上げながら雪山を駆け上ります。驚いて逃げる兎を、待ち伏せた猟師が鉄砲で撃ち、兎鍋にして食べました。肉が手に入りにくい時代にとりわけ貴重な冬のたんぱく源だったのです。抽象的なものでなく、現実にあったものなのです。

その橋からわきの小道を下ると小川が流れています。これが、「かの川」です。川も現実の川でありました。ここには鮒はいなかったのですが、日本で一般的な魚となると鮒が思い浮かぶため、鮒にしたと言われていました。

第三節の「志」の部分ですが、作者はうだつの上がない貧乏暮らしなのに、故郷に近い町の寺の住職の娘と結婚しました。その娘の祖母から「あなたはつる枝（娘）を幸せにできますか。将来人力車に乗って山門から入ってくるような男になる自信がありますか」と詰問され、「絶対、お約束します」と答えたといいます。作者が22歳の時です。

翌年、故郷の父にあてた手紙が残っており、「靴は破れて形を失し、衣はわずかに一重にして垢に染まり、洋服あれども外套なし（中略）村に鋤にぎり居らば、この苦労はなかりしもの。」と泣き言に近いですが、それでも帰郷せずに苦労した成果あって、二年後には文部省に入り、国語教科書編纂委員の職に就きました。

当時も今も中央官庁は学歴社会で帝大卒業者が出世する仕組みの中で、大学を出ていな

い作者は辛酸をなめました。

そこへ、父親から、帰郷して家業を継ぐように迫る手紙が届きました。当時、家業を継ぐのは長男の義務でした。作者にとって帰郷すれば今の苦労はなくなりますが、いったん志した道を閉ざしたくありませんでした。「今、学問をやめて帰郷することは男子としての生きがいがない」とあえて東京に留まり、弟を自分の養子にして家業を継がせました。

34歳で東京音楽学校（現、東京芸大）の日本歌謡史の教授になりました。その時ぐらいに「故郷」や「朧月夜」「紅葉」などを作詞しました。

その後、永江村に帰郷し、歌の通り「志をはたして」凱旋したのです。故郷を出て20年以上が経過し、作者は48歳になっていました。実家で大歓迎を受けた後、妻の実家に向かい、駅の近くでしたが、わざわざ人力車に乗って寺の山門をくぐり、妻の祖母の約束を果たしました。祖母は「生きていてよかった」と喜んだそうです。



高野 辰之

【唱歌が出来たいきさつ】

明治五年に「学制」が発令されると同時に、文部省が設立され小学校、中学校、大学の学校づくりが開始されました。

小学校の授業科目はそれまでの「読み書き算盤」型の教育内容が一新され、「習字、読本、修身、文法、算術、・・・唱歌」の十四教科があげられました。しかし、学問である以上、人間力を養うための教育的な面が必要ですが、唱歌はその手本となる教科書もなく、教える教師もおらず、それまで学問として扱われることのなかった音楽や体育は「当分乏を欠く」、つまり、しばらくは見合わせることになりました。

あらゆることを西欧諸国に習って、ひたすら西欧化を進めた政府は、愛知県師範学校校長であった伊沢修二にアメリカへの留学を命じ、音楽をはじめとした初等教育の調査研究に従事させました。

帰国し、その後明治十四年に「小学校唱歌集（初編）」が教科書として初めて編纂され、三十三曲の唱歌が生み出されました。その曲の大半は西洋の民謡、賛美歌などの音楽に日本の和歌風の歌詞を当てはめて創られたものでした。こうして我が国の音楽は、西洋の音楽に日本語の歌詞を融合させた和洋折衷として誕生し、その後オリジナルな素晴らしい展開を見ることになります。



伊沢 修二

最初の教科書「小学校唱歌集」の緒言（しょげん、前書きのこと）には、「凡そ教育の要は徳育、知育、体育の三者に在り、而して（しこうして）小学校に在りては最も宜しく徳性を滋養するを以て要とすへし」と記されています。このように伊沢は、「音楽には人の心を正し、風化を助ける働きがあることから、徳性を養うために唱歌は非常に有効である」と考えていました。

幕藩体制から中央集権の強力な新國家を建設するには、唱歌を通じて、児童の心に統一日本の國民としての自覚を育てる必要があり、大目的でもありました。

しかし、音楽の持つ特性として、「音楽は人生の自然に基づいて心情を感激させるものであり、喜びの歌は人を喜ばせ、和みの曲は人を和やかにする。人は和やかで正しいときは邪悪の念など入らないものだから、そういった性情を正しくするには音楽に及ぶものはない」とも言っています。

唱歌の見直し】

維新以来、新しい国家体制を築くことと並行して、唱歌は国民の意識向上と啓発を目的に普及しました。しかし、「徳育」「知育」の側面が強調され過ぎて、その歌詞があまりにも教訓的すぎるようになってきました。その結果、唱歌は学校では歌うが、学校から外に出ると

歌われないという。いわゆる「唱歌校門を出ず」の現象が現れました。

そのため、新しい唱歌作りのプロジェクトが編成され、尋常小学唱歌が誕生しました。この中には、「春の小川」「朧月夜」「冬景色」「故郷」などがあります。

童謡の誕生】

明治時代は、「富国強兵」「殖産興業」などの国家基盤の強化に国民と一体なって邁進してきましたが、大正時代に入ると、庶民生活レベルの向上と個人の自由が求められるようになってきました。そして、世にいう「大正デモクラシー」の波が起こり、大衆生活も大きく変化してきました。

その結果、子供たちの音楽世界にも自由で豊かな感性を芽生えさせる新しい運動が起こり、夏目漱石の門下生に当たる鈴木三重吉が、真に子ども向けの文学作品を発表しようと「赤い鳥」という雑誌を刊行しました。「赤い鳥」を始めとした民間の雑誌社、出版社が自由に作詞作曲をしました。その詩は唱歌のように教訓的ではなく、抒情や情景を優美に表現し、またその曲は軽快な前奏をつけ、ときに曲の途中で転調する技法を取り入れて、リズムカルな曲調を作り出しました。

この時に誕生した「かなりや」が日本初の曲譜付き童謡だとされています。身近なエピソードをわかりやすく描いた童謡は、あっという間に当時の子供たちに浸透しました。

唱歌と童謡の違い】

唱歌は、学校教育の教材で教訓的な内容が求められます。日本人としての精神や愛国心を育てることが大前提となり、当時の正しい日本語である文語体を使用。一方、童謡は、文学性を持ち、身近なエピソードを含んだ口語体を使用。

唱歌・童謡の役割】

学問である以上、教育的側面がある一方で、人生でつらい時や苦しい時、楽しい時と歌は私たちの身近なところに存在しています。歌によって、心が浄化されることがあり、心の豊かさにもつながるのが歌といえます。いわば、情緒や感性という言葉で表現できます。

『国家の品格』の著者藤原正彦氏は、本文の中で、「論理だけでは世界は破綻する」と言い切り、情緒の大切さを述べています。「情緒とは、論理以前のその人の総合力であり、その人がどういう親に育てられ、どのように先生や生徒に出会ったか、どんな小説や詩を読んで涙を流し、それらの諸々のことがすべて合わさって、その人の情緒力が形成され、論理的な発想の出発点となる。」

さらに、論理とか合理を「剛」とするならば、情緒は「柔」であり、堅い構造と軟らかい構造を相携えて、はじめて人間の総合判断力は十全なものとなると説いています。

情緒・感性には、「自然に対する優しい感受性」「四季の変化それぞれに美を感じる繊細な感性」「もののあわれ」「人と人との心の触れ合い」「感謝の心」といったものがあげられま

す。

一方の教育的な面として、唱歌の詩の特色を見ますと、①人倫・忠孝の道を説いた道徳的なもの、②人生における希望や研鑽の大切さを示したものの、③日本の豊かな自然美や季節感を唄ったもの、の三つがあります。①と②で、人としての根幹・基盤をつくり、③で、情緒・感性を養う。といった役割があったといえます。

唱歌・童謡はまさしく、“人としての道”を説き、“情緒・感性の育成”に作られたものがあります。

道徳的な面】

「蛍の光」

当時も現在も歌詞は児童には難しい詩句であります。文語詩は難解でありながら、なんとなく唄われてきたと思います。その詩句をみていきましょう。

一番の「ほたるのひかり。まどのゆき。」は、中国の故事“螢雪の功”。つまり、三世紀末から五世紀初頭の晋の時代、車胤（しゃいん）や孫康（そんこう）が貧しさのために灯がつけられず、窓辺の雪や螢の光で勉学に励み、後に大成した逸話から、苦勞して學問に励むことであり、勉学に日々を積み重ね、気付いてみればその過ぎてきた年月はいまの杉の戸を開けるように今朝は別れてゆくという意味です。「すぎのと」は、「過ぎ」と「杉」の掛詞。

（※掛詞とは、和歌の表現技法で、一つの言葉に同じ音の二つの意味を重ねて、表現内容を複雑・豊かにした技法。）

二番は、在校生も卒業生も今日を限りとして、数々の心の架け橋となった友情をいまは形見と思い「幸いあれ」とその一つの言葉を唄うのであります。

（※こころのはしは、端の掛詞）

私も含め、このような歌詞の意味を理解して唄っていたでしょうか？

この歌の三番四番であります、昭和十年代前半にはすでに唄われなくなっていたようです。その歌詞をみていきます。

三番の「つくしのきわみ。みちのおく。」は。古くは北九州の辺りを筑紫國と呼び、そのつくしの「きわみ」である最果ては旧薩摩藩の鹿児島県であります。「みちのく」は陸奥國などの東北であり、南北遠く離れていても、國家に尽くす忠誠の真心は南北の児童を隔てなく一つになって尽くせよと諭しているのです。

四番は、明治八年に「樺太・千島列島交換条約」を締結し、日本の最北端は占守島となり、明治十二年に最南端は沖縄県となりました。日本の領土であることを認識させることが「千島のおくも。おきなわも。やしまのうちの。まもりなり。」の歌詞となっています。

ということで難解な内容になっているのは、作詞に国学者が関わっているからと言われている。

「蛍の光」以外にも、「あふげば尊し」や「招魂祭」や仁・義・礼・智・信の「五常の歌」が小学唱歌集に載っています。

情緒・感性の面】

唱歌や童謡には、美しい日本語を習得するためのエッセンスが数多く含まれています。例えば唱歌の場合、そこには古くから日本で用いられてきた慣用的な言い回しや、文章を書く時の基本となる文語体による歌詞が際立っています。「失われつつある日本の伝統文化や美しい景観」が歌われています

また童謡の場合、「その時代ごとの児童心理や生活習慣・風習」などが歌われており、言葉のうら側に芸術性を見いだすことのできる文学作品である上に、それが一流文学者の競作によるもので、情操教育を意識して創作されたという点から考えても世界的に類を見ないものと言えます。言葉の抑揚やアクセントを大切にしたメロディーが多く、この言曲一致ともいべき手法によって唄いながら美しく正しい日本語の発音を身につけることが出来るわけです。

現在の子供から見れば（私たちがそうですが）「異文化」と言っても過言ではない事象と触れ合うことは、想像力の育成にもつながり、相手の気持ち汲み取る「思いやりの心」へと発展していくことでしょう。さらに、唱歌や童謡を美しく感じる心は日本語を美しく感じる心にもつながり、昨今問題視されている「言葉の乱れ」の解決にも一役買うものだといえるでしょう。

言い換えれば、唱歌や童謡を唄うことは、歴史的な文学者や音楽家に直接日本語を紐解いてもらっているのと同じようなことなのです。

唱歌・童謡の良さ 1】

外国人から見た（ひとりの中国人）唱歌や童謡の良さとして、地域の差はあっても子供の頃から音楽環境作られ、情操教育を全国津々浦々まで高めているような国は他にはありませんと言っています。

仕事や生活の楽しさや苦しさの中で、歌を唄いながら生き抜いてきたといえ、「生活の中の音楽の大切さ」を国民が充分に理解していたからだと思います。

また、数十曲の歌を何万人、何十万が同時に唄える国は日本以外にありません。みんなが歌詞を覚えていて、一緒に唄うことができる。みなさんは当たり前のことかも知れませんが、これは特別なことなのです。第九を唄えるのも、唱歌・童謡のおかげだと思います。

唱歌・童謡の良さ 2】

技術面）

「情緒・感性の面」でも触れました言曲一致ですが、現代では曲に詞を当てはめることもありますが、当時は詩に曲をつけるという形式をとり、これを言曲一致といいます。

単に言葉をメロディーに乗せているわけではなく、歌詞の言葉を吟味して、その言葉が持っている抑揚を壊してしまわないように曲をつけていました。例えば、「箸」という歌詞に

曲をつける時には音が下がっていくように作曲して、「橋」と聞こえてしまわないように配慮していました。

次に日本語の発音としまして、鼻濁音というものがあります。「わたしは映画が好きです」と書いた場合、発音は「ワタシワエーガーガスキデス」となり「は」は「わ」と読むのと同じように「が」も「ガ」と書いて濁音の「ガ」と鼻にかかった「ンガ」という音があります。大まかに言って、語頭の「が」は濁音ですが、語中の「が」や助詞の「が」は鼻濁音になります。例えば、「ツキガノボルシ〜」というときの「ガ」という発音は、学校などと発音する時の「ガ」と違います。鼻濁音は、鼻に抜いた柔らかい声にするのが日本語発音の決まりです。こうしたことも歌の時間に学習しました。

美しさ)

「かなりや」は、大正七年に作られたもので、童謡第一号の歌です。

作詞者の西条は、この歌の解説について、母親と娘の二人の会話として次のように解説しています。

娘)「お母さん、このかなりやは鳴かなくなりましたね。かなりやが鳴かないのではここに置いていても仕方がないので、捨てましょうか。」

母)「いいえ、それはだめですよ。」

娘)「じゃあ、このかなりやは唄を忘れたのだから、柳の鞭でぶつたら、唄を思い出すかもしれませぬね。」

母)「いいえ、それは可哀そうですよ。お母さんが思いますのは、このかなりやは怠けて唄を歌わなくなったのではないでしょう。何か辛いこと、悲しいことがあって歌を唄えなくなったのでしょうか。人間もこんな時があるのですよ。辛いことあっても前に進もうとしても一歩も進めない時が。」そんな時はそっとしてあげるか、少しでも前へ進み易い環境をそっと作ってあげることでしょう。このかなりやを象牙の船に乗せて、月夜の晩にそっと海に浮かべれば、忘れた唄を思い出すかもしれませぬね。」

この歌からは、人を思う温かな心を、目の前のかなりやを介して親子で、優しく語りかけるこの詩は、まさしく“情緒”の大切さを充分に歌い上げていると言えます。

「殖生（はにゅう）の宿」明治二十年の唱歌です。

この歌は、海外の歌に里見義（ただし）が訳を付けて、「殖生の宿」と題して、発表したものです。春と、秋の季節をたたえ、家族の温かな眼差しを詩にしました。

「殖生の宿」とは、土がむき出しの粗末な家のこと。「たのしとも たのもしや」は、豊かで満ち足りているの意味。「我が家は土でできた粗末な家であるが、春には花が美しく咲き、鳥がさえずり、また秋には月が輝き、虫がすぎく、素晴らしい環境の中で、家族全員が、心豊かに満ち足りて毎日生活している」と歌い上げています。

この歌は人間と自然の調和の中で四季の変化を感じ、感謝の心を持って家族の愛が育てられているという素晴らしい情緒を語り掛けており、歌っているうちに心が清められていく

思いがします。

この二つの事例を見ても「人を想う温かな心」や「家族の絆や感謝」が感じられ、情緒や感性を育むことの重要性がわかります。

また、「まことに日に新た日々新たに、また日に新たならんと」という言葉をご存じでしょうか。

中国の殷の國の湯王は、顔を洗うたらいに文字を彫りつけていました。毎日、水で顔を清めるとともに、この言葉で自らの心を清め、日々新たな気持ちで生きようと努めた、とされています。

このことから、心を清め、一日を過ごすことが大切であることがわかります。そのような行為が、私たちの身近な音楽、唱歌や童謡にあることが言え、その唱歌・童謡に小さいころから自然と触れていることは、まことに有り難いことです。

まとめ】

日本の原点である、自然への感謝や和を大切にすることを歌っている唱歌や童謡は世界に誇れる文化のひとつといえるのではないのでしょうか。

今の時代、社会状況や価値観も大きく変化していますが、明治人の気概や國家観、子供を思う気持ち、また子供の感性を育て豊かな情操を養うことの大切さや言葉を正しく使うことの重要性を唱歌や童謡は私達に気づかせてくれています。

美しく正しい言葉は国語力の基礎学力につながり、自然のありがたみや四季を感じることは日本の良さを知ることにつながります。これらを疎かにすることは健全な國家意識の育成を阻害することになります。

このことから唱歌や童謡の志を理解し、心で感じ、受け止めて、時代に左右されることなく次世代に引き継ぐことが、日本復活の一助となるといえます。

参考・引用文献

「唱歌・童謡で学ぶ、伝え続けたい日本のこころ」 著：二宮清，李広宏 ，五日書房

「心の歌よ！日本人の故郷を求めて」 著：伊藤千尋 ，新日本出版

「正しい唱歌・童謡のススメ」 著：海沼実 ，ノースランド出版

「唱歌と国語」 著：山東 功 ，講談社選書メチエ